

「賀川豊彦のお宝発見」その3

新聞記事にみる賀川豊彦 (46)

1910 (明治43) 年~1963 (昭和38) 年 (神戸版)

第46回 「賀川豊彦氏の思い出」ほか

「神戸市教育委員：賀川氏の後任」

1960 (昭和35) 年
4月27日
「神戸新聞」

秋まで欠員のままか

市教委 賀川氏の後任委員

賀川豊彦氏(神戸市教育委員)の死去にともない、神戸市教委では空席になった同氏の後任委員について検討しているが、時期をいつにするかについては態度を決めかねている。

賀川氏は、教育委員が公選制から任命制にきりかえられた新教委法にもとづき三十一年十月一日、瀬戸文雄、大島堅造、手塚政雄、小泉ハツセの四氏とともに原口市長に任命された。この

とき、全委員の任期を同じにして教育行政のブランクを起こしてはいけなさと教育行政法付則で四年、三年、二年、一年委員と五人の委員の任期をそれぞれ分けたが、賀川氏は二年委員に任命された。さらに三十三年九月二十日に四年委員として再任されたので、任期は三十七年九月三十日までであり、その途中で死去したのも、

をはかるためには早急に後任を決めなければならぬが、三十一年十月一日に四年委員に任命された大島委員と、交通事故死した瀬戸委員(四年)の後任に選ばれた木戸只二委員長の任期が九月三十日に切れるので、あと五カ月ほど現在の欠員のままとし、大島、木戸両氏の任期満了の時期とともに賀川氏の後任も考慮したい意向を持っている。

このため教育委員会の正常な運営

秋まで欠員のままか

市教委 賀川氏の後任委員

賀川豊彦氏（神戸市教育委員）の死去にともない、神戸市教委では空席になった同氏の後任委員について検討しているが、時期をいつにするかについては態度を決めかねている。

賀川氏は、教育委員が公選制から任命制にきりかえられた新教委法にもとづき三十一年十月一日、瀬戸文雄、大島堅造、手塚政雄、小泉ハツセの四氏とともに原口市長に任命された。このとき、全委員の任期を同じにして教育行政のブランクを起こしてはいけないと教育行政法付則で四年、三年、二年、一年委員と五人の委員の任期をそれぞれ分けたが、賀川氏は二年委員に任命された。さらに三十三年九月二十日に四年委員として再任されたので、任期は三十七年九月三十日まであり、その途中で死去したものの。

このため教育委員会の正常な運営をはかるためには早急に後任を決めなければならないが、三十一年十月一日に四年委員に任命された大島委員と、交通事故死した瀬戸委員（四年）の後任に選ばれた木戸只一委員長の任期が九月三十日に切れるので、あと五カ月ほど現在の欠員のままとし、大島、木戸両氏の任期満了の時期とともに賀川氏の後任も考慮したい意向を持っている。

「賀川記念館・来年2月着工」

1960（昭和35）年4月30日「神戸新聞」

来年一月から着工

賀川記念館 診療や生活指導など

社会労働運動に一生をささげ、二十三日なくなった賀川豊彦氏の生前の事業を継ぐための賀川記念館が三十六年二月から建設に着手することになった。賀川記念事業委員会（委員長、杉山元治郎氏）では賀川氏の社会運動のゆかりの地である神戸舞合区新川に記念館を建設することにし、工費四千万円の寄付金募集の準備を進めていたが二十八日政府から基金募集について承認されたので、本格的な建設準備に取りかかることになったもの。

この記念館は鉄筋コンクリート

三階建て総面積は千二百三十七平方メートル、診療所や生活相談所を設けて日常の業務をつづけ、ほかに社会福祉の向上に役立つ事業や後援などを行なうことになっている。工事費にあてる四千万円の寄付金は広く一般から

募集されるが、このうちの二千万円は米国やカナダなどから贈られる予定で、残りの三千万円は兵庫県、大阪府など全国から募集する。完成は三十六年七月末の予定。

来年二月から着工

賀川記念館 診療や生活指導など

社会労働運動に一生をささげ、二十三日なくなった賀川豊彦氏の生前の事業を継ぐための賀川記念館が三十六年二月から建設に着手することになった。賀川記念事業委員会（委員長、杉山元治郎氏）では賀川氏の社会運動のゆかりの地である神戸葺合区新川に記念館を建設することにし、工費四千万円の寄付金募集の準備を進めていたが二十八日政府から基金募集について承認されたので、本格的な建設準備に取りかかることになったもの。

この記念館は鉄筋コンクリート三階建で総面積は千二百三十七平方メートル、診療所や生活相談所を設けて日常の業務をつづけ、ほかに社会福祉の向上に役立つ事業や後援などを行なうことになっている。工事費にあてる四千万円の寄付金は広く一般から募集されるが、このうちの一千万円は米国やカナダなどから贈られる予定で、残りの三千万円は兵庫県、大阪府など全国から募集する。完成は三十六年七月末の予定。

「賀川氏の葬儀」
1960（昭和35）年
4月30日「神戸新聞」

賀川氏の葬儀 青山学院大礼拝堂

故賀川豊彦氏の葬儀は、日本基督教団、明治学院、日本社会党ほか関係諸団体の合同葬として二十九日午後一時から、東京渋谷区緑岡、青山学院大礼拝堂で行なわれた。河上丈太郎、浅沼稻次郎の各氏ら政界関係者をはじめ原口忠次郎神戸市長、薄井一哉尼崎市長のほか故人にゆかりのある人たちが多数が参列、故人の愛唱歌だった讃美歌四九五番「イエスよこの身をゆかせたまへ」が流れるなかを悲しみもあらたに進められた。

賀川氏の葬儀

青山学院大礼拝堂で

故賀川豊彦氏の葬儀は、日本基督教団、明治学院、日本社会党ほか関係諸団体の合同葬として二十九日午後一時から、東京渋谷区緑岡、青山学院大礼拝堂で行なわれ

た。河上丈太郎、浅沼稻次郎の各氏ら政界関係者をはじめ原口忠次郎神戸市長、薄井一哉尼崎市長のほか故人にゆかりのある人たちが多数が参列、故人の愛唱歌だった讃美歌四九五番「イエスよこの身をゆかせたまへ」が流れるなかを悲

しみもあらたに進められた。

「嘉治隆一
賀川氏の思
い出」
1960(昭
和35)年
5月1日～
2日
「神戸新聞」



初めて賀川豊彦さんを新川のセツルメントに訪ねたのは私がまだ東大にいたころであった。学校を出て間もなかった赤松克

君とそのころ愛用していた将校マントを一着に及んだ

陣花さんとそれから、中学生だった私の舎弟

とが一緒であつた。近

い馬場たけし無志家のお医者さんが手伝いでくれるようになったといつてその診察室へも案内せられたのをおぼえている。それからも間もなく、東京で再

賀川氏の思ひ出(上)

嘉治隆一

会した時には、どういふわけか山高帽子を冠つてニコニコせられていた。大正八年十二月、私どもの高田村の合宿で催した招待会に來られないといふので、一編の長詩を贈つて下さつた。「先駆者を思ふ」といふような

その時の結びの句が「民衆よ、帽子をとれ！そこに我等の先駆者が行くではないか」といふ

まらのは、赤松の無断を快からず思っている自重派の連中であつた。賀川さんの意向が多分

表題のものでつたと思ふ。ちよつと、そのころ私たちの出していた同人雑誌を改題して「先駆」といふ名にする事になつて

いた時に当たつていたものだから、匿名人の赤松が無断で、この賀川さんからの献詩をその雑誌の巻頭にのせてしまつた。なして、私たちが赤松一派とた

もとを別ち、別に「社会思想」といふ月刊研究誌を出すような結果となつた。さて、賀川さんはその後も

「貧民心理の研究」といふ著書を出した。賀川さんはその後も、話の内容もなかなか豊富であり、引証

は、書店がすすめるままに、わむを得ず紙にまで附落する」といふような文句がその序文の中にあつたように思ふ。

この点について、後に賀川さんが「太陽を射るもの」をはじめとし、無数の著述を連発されるようになったとき、その従兄にあたる新野格氏が、私に尋

ね「紙に」といつたりした。

賀川氏の思い出（上）

か じ りゅう いち
嘉 治 隆 一



初めて賀川豊彦さんを新川のセツルメントを訪ねたのは私がまだ東大にいたころであった。学校を出て間もなかった赤松克麿君とそのころ愛用していた将校マントを一着に及んだ碎花さんとそれから、中学生だった私の舎弟とが一緒であった。近ごろ馬島という篤志家のお医者さんが手伝ってくれるようになったとってその診療室へも案内せられたのをおぼえている。

それから間もなく、東京で再会した時には、どういわけか山高帽子を冠ってニコニコせられていた。大正八年十二月、私どもの高田村の合宿で催した招待会に来られないというので、一編の長詩を贈って下さった。「先駆者を思う」というような表題のものであったと思う。ちょうど、そのころ私たちの出していた同人雑誌を改題して「先駆」という名にすることになっていた時に当たっていたものだから、署名人の赤松が無断で、この賀川さんからの献詩をその雑誌の巻頭にのせてしまった。

その詩の結びの句が「民衆よ、帽子をとれ！そこに我等の先駆者が行くではないか」というようなことになっていた。収まらないのは、赤松の無断を快からず思っている自重派の連中であつた。賀川さんの意向が多分に私たちを激励するにあつたことはもちろんであつたにしてもそれをいい気になって自分らの同人雑誌の巻頭に載せるなんて何事だ。うぬぼれもはなはだしいというのが、その非難の眼目であつた。そんなことも遠因をなして、私たちが赤松一派とたもとを別ち、別に「社会思想」という月刊研究誌を出すような結果となつた。

さて、賀川さんはその後まもなく「貧民真理の研究」という処女出版をたしか警醒社から世に問われた。「自分の仕事は紙の上にはないが、新川貧民街での経験を人々に知ってもらってはと、書店がすすめるままに、やむを得ず紙にまで墮落する」というような文句がその序文の中にあつたように思う。

この点について、後に賀川さんが「太陽を射るもの」をはじめとし、無数の著述を連発されるようになったとき、その従兄にあたる新居格氏が、私に笑いながら「賀川もいい男だが、こんなにひっきりなしに『紙にまで墮落』せられてはまったく応接にいとまがなさすぎるよ」とこぼしていたことがある。

賀川さんは雄弁家で、話の内容もなかなか豊富であり、引証該博、複雑な数字なども立ちどころに口に上って来る。私どもはその記憶力に舌をまいていた。ところが故人三輪寿壮の話では「二、三度、賀川さんと一緒に歩いているとその口に上る数字が、時々

で違っていることが分かって来る。でたらめというわけではなからうが、必ずしも正確無比というわけでもないらしい。しかし正確な数字というものは、別に雄弁の条件になるものでないらしいから、あれはあれでいいのだろうね」といったりした。



随想

旧友の山岳家、板倉勝宣君は 転車にのって行った。そして賀川さんの方は、タキシードのない 演説へ引き出されたこともあり、冬の前、冬の立山で凍死した風格のある人物であった。同君が札幌の学生時代の見聞として面白い話をしていたことがある。

なんでも 北大教授の 森本厚吉博士が口をきいて、賀川さんを調度と迎えたことがあるが

そのときの 光景を面白おかしく話してくれた。賀川さんと森本博士とはともに米國仕込みの紳士であつたから、どこかに共通の合理主義を身につけていたらしい。森川さんが停車場に迎えただけだが、いつものように自

車にのって行った。そして賀川さんの方は、タキシードのない演説へ引き出されたこともあり、冬の前、冬の立山で凍死した風格のある人物であった。同君が札幌の学生時代の見聞として面白い話をしていたことがある。

なんでも 北大教授の 森本厚吉博士が口をきいて、賀川さんを調度と迎えたことがあるが

そのときの 光景を面白おかしく話してくれた。賀川さんと森本博士とはともに米國仕込みの紳士であつたから、どこかに共通の合理主義を身につけていたらしい。森川さんが停車場に迎えただけだが、いつものように自

賀川氏の思ひ出(下)

嘉治 隆一

つたという板倉君の言葉がまた はなはだユーモラスであつた。片時もじつとしていられなかつた賀川さんは、日米開戦前に 渡米して全米何百回の平和演説をして回つたことがあるが、むしろ平和主義はもっと日本国内でこそ演説せらるべきものであつたらう。戦争になつてからつ

ケ谷へ同伴した。何年かぶりに 会つたわけだが、賀川さんは孝君に向かつて「旧い旧い友人で すよ」と説明された。

一九二九年の夏のことであつた。ユーゴスラビアの首都ベオグラードを訪れた私は、ある日 曜日の朝、中央公園のベンチに 腰をかけて、ドナアの流れを見

「私はあの人の書かれたものを 読んで文通がしたくなつた のです」

「何となくとも、日本有数の 平和主義者と思ひますが……」

「しかし賀川さんの七十年の生 涯において、社会的に最もはな やかな時といへば、なんといつても神戸時代、それも川崎造船 のストライキ、普通選挙要請の 示威運動をめぐるところのことであつた。草木の花は毎日咲くが 人生の花はまず一度でも咲かせ れば、それでよいとすべきでそ う欲はっても仕方がない。」

賀川氏の思い出（下）

か じ りゅう いち
嘉 治 隆 一



旧友の山岳家、板倉勝宣君は北大出身で、関東大震災よりも前に、冬の立山で凍死した風格のある人物であった。同君が札幌の学生時代の見聞として面白い話をしていたことがある。

なんでも北大教授の森本厚吉博士が口をきいて、賀川さんを講演に迎えたことがあるがそのときの光景を面白おかしく話してくれた。賀川さんと森本博士とはともに米国仕込みの紳士であったから、どこかに共通の合理主義を身につけていたらしい。森本さんが停車場に出迎えたわけだが、いつものように自転車にのって行った。そして賀川さんの方は、タクシーのないそのころのことで、人力車をやとってもらい、例により山高帽子を冠って泰然と座っている。

人力車と自転車とが並んで徐行しながら相顧みて四方山の話をお互いに交わして行く街頭風景にはなんとなくほほ笑ましいものがあったという板倉君の言葉がまたはなはだユーモラスであった。

片時もじっとしていられなかった賀川さんは、日米開戦前に渡米して全米何百回の平和演説をして回ったことがあるが、むしろ平和主義はもっと日本国内でこそ演説せらるべきものであったろう。戦争になってからフィリピンの占領地へ、宣撫演説へ引き出されたこともありそんなわけで戦後、いくらか G 項該当のけん疑をかけられたりした。口八丁手八丁の賀川さんにつきまとう功罪であった。ユネスコの駐日代表に中国の李博士が来ていたころ、ぜひ賀川さんに会いたいという話で、世田ヶ谷へ同伴した。何年かぶりに会ったわけだが、賀川さんは李君に向かって「旧い旧い友人ですよ」と説明された。

一九二九年の夏のことであった。ユーゴスラビアの首都ベオグラードを訪れた私は、ある日曜日の朝、中央公園のベンチに腰をかけて、ドナアの流れを見おろしていた。すると隣のベンチに本を読んでいた土地の老人から突然言葉をかけられた。

「日本からお出でになりましたか」

「賀川豊彦という人をご存じですか」

「私的にご交際がおありですか」

「私はあの人の書かれたものを読んで文通がしたくなったのです」

「何と云っても、日本有数の平和主義者だと思いますが・・・」

というような話であった。それが切っ掛けとなって独裁政治と民主政治とについていろいろと意見を交換した。そして「必ず賀川さんに連絡して上げよう」といって別れた。その

旅の末に米国に渡り、シカゴへ行った時近く賀川さんが来られるという話を聞かされた。そこで私は彼のベオグラードで会った老紳士のことを書き残し、文通してやって下さいと依頼の手紙をシカゴ領事館の係りの人に託留した。

日本に帰ってしばらくしてから、賀川さんに会ったので、シカゴに残した手紙のことにふれたところ「確かに受け取りました」ということであった。あの老紳士も風の便りに賀川さんの訃報を知ったならばさぞ驚くことであろう。

しかし賀川さんの七十年の生涯において、社会的に最もはなやかな時といえば、なんといっても神戸時代、それも川崎造船のストライキ、普通選挙要請の示威運動をめぐるころのことであった。草木の花は毎日咲くが人生の花はまず一度でも咲かせれば、それでよいとすべきでそう欲ばっても仕方がない。